

まえがき

人生の旅での出会い

人生には幾度か自分の運命を切り開いてくれる人との出会いがある。梅原猛先生との出会いがなかったら、私は広島大学で万年助手として研究者人生を終わったことであろう。私は梅原猛先生に足をつけては寝られない。

広島大学時代は「どうしてやることなすことがこれほどうまくいかないのか」と思うほどに苦勞の連続だった。それは今にして思えば天命であったと思う。

一九八八年四月に国際日本文化研究センターに採用いただいた、梅原猛先生から命じられたのは長江文明の探求だった。瀬戸内海が地中海と似ていることもあり、広島大学時代に私は地中海文明の研究をしていた。西洋文明の原点ともなったギリシャやローマ文明の研究に一生をかけようと思っていた。ところが突然、梅原猛先生から「西洋ばかり見ていたのでは人類文明史の本質はわからんぞ。東洋の稲作漁撈の研究をしろ！」と命じられたのである。「稲作？ 常日頃から見慣れているものじゃないか。そんなこと研究して何になるのか」というのが当初の私の思いだった。しかし梅原猛先生は、当時、京セラ株式会社の会長をされていた稲盛和夫先生にお願いされて調査研究費まで用意された。こうして私の長江文明の探求ははじまったのである。

一九九〇年代初頭の人類文明史や世界史が、いまだに欧米中心主義に立脚していたことは否めなかった。古代の四大文明（メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・黄河文明）は、欧米文明と同じく麦作農業（黄河文明はアワもあるがいずれも畑作）に立脚し家畜を飼い、パンを食べ、ミルクを飲んでバターやチーズを造り、肉を食べる畑作牧畜民が作った文明であつた。お米を食べ、味噌汁を飲んで、発酵食品や魚介類を食べる稲作漁撈民は、文明を持っていなかったというのが常識だつた。もちろん欧米人の中にも、C・レヴィストロースや、A・トインビーのような研究者もいたが、世界の大勢は、文明は畑作牧畜民のものであるという見解に立脚し、その見解を当の稲作漁撈民さえ受け入れていたのである。

日本の高等学校の世界史の教科書にも、「古代文明は畑作牧畜民が跋扈したメソポタミアの肥沃な三日月地帯で誕生した」という説が常識として掲げられていた。そうした中で、稲作漁撈民も畑作牧畜民にまけず劣らずの文明を持っていたのではないかと私は指摘した。それが「長江文明の発見」であり、梅原猛先生が指摘された「稲作漁撈を研究しろ！」という教えだったのである。

現在では中国随一の観光地になっている湖南省張家界に出かけた時のことである。洞窟の前に立つて、白いひげを生やした老人とやや若い弟子と見られる人が「こいこい」と手招きをする。一九九〇年代の初めはまだ観光客も少なく、たぶん客待ちをされていたのであろう。そうしたら「手相を見てやる」と言う。手を差し出すと、「あなたは悪い人にも会い、若い頃はさんざん苦労しましたね。しかし四二歳の時に偉い人に助けられる。それからは何でも思うようにいきますよ」とその易者は言ったのである。



梅原猛氏（左）と著者（四川省龍馬古城墩にて。
1994年、井上隆雄撮影）

「えっ！ 四二歳の時ですか。」私は驚いた。四二歳とは、私が梅原猛先生に助けられて国際日本文化研究センターに着任した年である。その私を助けてくださった偉い人とは梅原猛先生のことには違いないと私は確信した。手相もむげにはできないものである。

易者が予言したとおり、私はその後、国際日本文化研究センターで恵まれた研究環境の中で、おもうぞんぶん研究ができた。本書はその研究成果の一端をとりまとめたものである。

さらに梅原猛先生は九〇歳になられてもかくしゃくとされ、頭脳明晰で、講演をされるだけでなく、つぎからつぎへと著書を著わされ、まさに易者が言ったように「千年に一度出るかどうかの偉い人」

だったのである。

私にとって恩師に序文を書いていただけるとは願ってもないことである。まことにありがたいことである。人生は旅でもある。その旅の途中で梅原猛先生に出会い、中国各地はもとより、トルコ、ギリシャやエジプトさらにはバリ島にまで足を延ばすことができた。梅原猛先生と私の関係は芭蕉と曾良のような関係なのかなと時々思うことがある。

日本の年縞の時間軸が世界の標準になった

「時間を支配することは文明を支配すること」と考えたのはヨーロッパ人だった。一八七二(明治五)年一月三日まで、私達日本人は現代の太陽暦(グレゴリオ暦・新暦)とは全く異なった、太陰暦(旧暦)の時間の中で暮らしていた。

歴史学や環境考古学は時間の学問である。明治時代以降導入された近代歴史学の時間軸は、まさに太陽暦(グレゴリオ暦)の時間軸に立脚していた。日常の時間も江戸時代とは全く異なった太陽暦の時間となった。そして欧米文明の時間が日本人の生活のすみずみにまで浸透し、日本人は欧米の時間軸に立脚したライフスタイルを受け入れた。その時間の基準はイギリスのグリニッジ天文台に置かれた。

過去の地球環境史の時間もまた、欧米人が打ち立てた時間軸が世界の標準だった。暦年代に換算して一万一五〇〇～一万一七〇〇年前に地球は大きな環境の変動をこうむったという欧米のデータが世界の標準になった。ところが日本列島などの温帯地域や亜熱帯地域などにおいては、一万一五〇〇～一万一七〇〇年前よりもっと大きな変化が、一万五〇〇〇年前にあることが分かった。日本列島では一万五〇〇〇年前こそ、氷河時代の生態系が収束に向かい、生態系が大きく移り変わる時代だった。その時代に日本列島では縄文文化が誕生した。その変化は、欧米の人々が指摘する一万一五〇〇～一万一七〇〇年前の変化よりはるかに大きなものだった。だがこうしたアジアの温帯や亜熱帯地域の分析結果は、ながらく世界の標準になることはなかった。

しかし、欧米の分析結果は氷河周辺地域という特異な環境で得られたものである。一万五〇〇〇年

前のスカンジナビア半島は厚さ三〇〇mにも達する氷河に覆われていたし、アメリカ大陸北部もローレンタイド氷床と呼ばれる大陸氷床に覆われていた。そんな氷河の縁辺や周氷河地域では、人類さえ居住できなかった。その氷河周辺や氷河地域のきわめて特異な環境のもとで得られた分析結果が、世界の標準として長らく信奉されて来たのである。それをなさしめたのは欧米の科学技術と物質エネルギー文明の力だった。

だがやっと欧米の研究者は自分達のデータが、世界の標準とはかけ離れた、特異な場所のデータであることを認めるようになった。それをなさしめたのが福井県水月湖の湖底から発見された年縞の分析結果である。私はその年縞を水月湖で初めて発見したが、その分析結果を世界の時間軸の標準にまとめたのは、名古屋大学北川浩之教授やイギリスのニューカッスル大学教授から二〇一四年の春に立命館大学に着任した中川毅教授らである。私の弟子と言うとおこがましいが、私とともに国際日本文化研究センターで年縞の研究を一緒に行った仲間である。梅原猛先生から見れば彼らは孫弟子にあたる。

水月湖の年縞の時間軸が世界の標準になった。もちろん現在の時間の標準はグリニッジ天文台のままであるが、過去の時間軸の標準としてはアジアのしかも日本の水月湖の年縞の時間軸が世界の標準になったのである。さらに文部科学省新学術領域「環太平洋の環境文明史」の研究代表者として立派な成果を上げてくれた茨城大学青山和夫教授らも、文理融合の科学としての「環境考古学」の重要性を継承発展してくれる仲間である。

歴史学や環境考古学は時間の学問であると書いた。明治以降の近代歴史学の進展は、欧米人の時間

軸が日本人のライフスタイルにまで浸透・拡散することでもあった。ところがその歴史学や環境考古学に、時間軸を与える画期的な手法として、天は私に年縞という物差しを与えてくれたのである。「年縞の分析結果から明らかにになった時間軸によって、人類文明史を書き変えろ」とあたかも天が命じているかのようになんぞ思った。

本書はその年縞の分析結果に立脚して、新たな人類文明史・世界史を再構築する試みである。

日本の宝、年縞のさらなる研究を

日本列島の湖沼は世界の中で年縞の形成にきわめてすぐれた条件を有している。海洋環境の変動で年縞の解析から明らかにできるところは日本列島を含めて世界でもわずかである。中国大陸のいくつかの湖沼では、約四〇〇〇年前まで年縞が形成されていても、それ以降年縞の形成はなくなる。おなじようにイースター島においても一二世紀までは年縞が存在したが、それ以降は年縞の形成はほとんどなくなる（本書第六章参照）。これに対し、日本列島の年縞のあるほとんどの湖では、現在に至るまで年縞が形成されている。それは日本列島という風土の特殊性と森・里・海の物質循環に大きな変更をもたらすことなく、豊かな自然を維持してきた日本人の祖先たちのライフスタイルの賜物なのである。日本列島が生物多様性に富む列島であることと、年縞が現在まで保全されている環境であることは深く関わっている。

しかし、その日本の宝とでも言うべき年縞は、ようやく研究がはじまったばかりである。私はその重要性を訴え続けてきたが、なかなか理解されなかった。日本の宝物なのにどうしてその重要性がわ

からないのだろうと悔しい思いも何度かした。しかし、これもまた天が采配をふるって来ていた。私の下に有能な若い後継者を送り込んでくれたのである。

これからは、現在より摂氏何度低くなったのか高くなったのか、降水量が何ミリ多くなったのか少なくなったのか、何年かかってその気候変動は起こったのか、中国大陸と日本列島ではどう違ったのか、いや東日本と西日本ではどう違ったのかということ、年単位・季節単位で厳密に明らかにしなければならぬ。そしてその環境史の変動が人類の文明や歴史の展開とどう関係していたかを解明しなければならぬ。

中川毅教授らはベスト・モダン・アナログ法を開発し、過去の気温変動を絶対値で表記する試みも行っている。ヒトのDNAの全解読のプロジェクトが実行されたように、こんどは世界各地の年編（ジェオゲノム）の解析から、「全地球年編解読プロジェクト」をぜひとも推進していただきたいものである。

これまでは、氷河時代の寒冷気候と完新世の寒冷気候を、日本語で表記する場合においてさえ、明白に区別をもうけてこなかった。しかし、年平均気温が現在より摂氏七〜八度も低い氷河時代の寒冷気候と、年平均気温が摂氏一〜二度低い完新世の寒冷気候は、同じ寒冷気候でもまったくことなり、当然のこととして日本語の表記上でも区別されてしかるべきであった。我々専門家はわかっている。一般の人はわからない。

本書では摂氏三度の年平均気温の低下を目安として、寒冷気候と冷涼気候に区別することにした。年平均気温が現在より摂氏三度以上低かった時代を寒冷期と表記し、年平均気温が現在より摂氏一〜

二度低かった時代を冷涼期と表記する。

しかし、すでに発表された「古墳寒冷期」のような用語は、一般に広く定着し使用されているので、変更せずそのままにした。

私の役割は日本列島の年縞を発見し、年縞による時間軸の決定と年単位の環境史復元の道を開き、新しい文明史・歴史を再構築する契機を作ったことであつたと思う。

後は若くて優秀な後継者に年縞の研究を託し、私たちは彼らの研究環境を整えるよう全力を尽くさなければならぬと思う。

大学での集中講義

私は二〇〇三年に東北大学に「大学院環境科学研究科」が創設され、二〇〇四年に京都大学に「フィールド科学教育研究センター」が開設された時、大学院生対象の最初の記念すべき集中講義を、期せずしてお引き受けすることになった。

本書の元になった「環境文明論」という集中講義を私に依頼されたのは、東北大学東北アジア研究センター長であつた平川新教授（現、宮城学院大学学長）である。実には確な授業科目名をつけていただいたと深く感謝している。京都大学の集中講義を依頼されたのは、フィールド科学教育研究センター長であつた田中克教授（現、京都大学名誉教授）だつた。

集中講義は若い学生に語りかけるまたとない絶好のチャンスであるとともに、自分の考えがどのようにならば受けとめられるかを知るいい機会でもあつた。それゆえ集中講義には全力を投入し、その

時点における自分もっているものすべてを学生に問いかけた。集中講義は私にとっては若者との真剣勝負であった。

集中講義が終わると私はしばらく放心状態になるほどに疲れたが、東北大学では名物講義になり、学生にも人気があったようである。いつも一〇〇人近い大学院生で教室はあふれていたし、ときには単位とは関係のない他学部の学生も聴講に来てくれた。

講義の内容を本にすることにためらいもあつたが、このような苛酷な集中講義の記録を残しておくことは私の人生にとつても重要な意味があると考え、刊行に踏みきることにした。

本書の概要

私は四日間のうち、午前八時三〇分から午前十二時三〇分と、午後一時三〇分から午後六時に大きく二課題にわけて、全部で八課題についての講義を行った。それが本書の第一章から第八章になった。午前と午後の授業が終わったあとには、かならず感想文や意見を学生に書いてもらい、翌日の授業の参考にするともに、それを採点し合計して評価点数にもした。遅刻はゆるさず早退もゆるさない厳しい授業にした。その感想文は今も大切に保管している。

第一章の講義は「環境文明論とは」である。私の自己紹介もかねて東北大学に環境科学研究科が創設されたことを記念し、そこに入学された大学院生に自分の体験をふりかえりながら、環境文明論を学ぶこととはなにかという学問論を私なりに展開したものである。

第二章の講義は「環境文明論の最新の方法——年縞の発見」である。環境文明論を展開するうえで

必要な最新の研究方法について概説する。年編の発見は正確な時間軸を決定するうえで画期的な発見となった。

第三章の講義は「照葉樹林文化論と農耕起源論」である。京都大学には、今西錦司博士あるいは西堀栄三郎博士に代表される、フィールド・サイエンスの「京都学派」のすばらしい伝統があり、私自身も、京都学派にあこがれ、大きな影響を受けた。私の弟子のなかには、京都大学から国際日本文化研究センターにきて研究者になった人が何人かいる。そこで、第三章目の講義は、京都学派のフィールド・サイエンスが生み出したすばらしい学説である「照葉樹林文化論」についてお話をしたい。照葉樹林文化論は当初から「農耕起源論」との深い関係の中で提唱された学説である。人類が文明というものを手にする第一歩は、農耕革命にあった。それゆえ農耕の起源はゴードン・チャイルド以来、人類文明史を考察する上で多くの人々が強い関心をはらってきた課題である。近年、農耕革命が引き起こされた晩氷期の環境変動が詳細にあきらかとなり、麦作の起源が環境変動との関係において明白になるとともに、稲作の起源についても新発見があいついでいる。ここでは最新の農耕起源論についてご紹介する。

第四章の講義は「稲作漁撈文明論——長江文明の発見」である。これまで古代文明とみなされてきたメソポタミア、エジプト、インダス、黄河の四大文明のほかに長江文明が存在することが注目されはじめた。四大文明はいずれも畑作牧畜民が創造した都市文明であったのに対し、近年その存在が注目されはじめた長江文明は稲作漁撈民が創造した文明である。戦後七〇年間、私たちが正しいと思つて学んできた世界史は、畑作牧畜民の世界史だった。私たち日本人は稲作漁撈民であり、もとをたど

れば縄文人の子孫なのである。日本文明を構築した稲作漁撈文明の価値を再発見し、新たな世界史像を構築をすべき時に来ているのではないかというのが、本章の主張である。

第五章の講義は「気候環境文明論」である。マヤ文明の崩壊についてはこれまで多くの謎に包まれて来たが、近年の年縞による高精度の環境史の復元によって、その崩壊の原因がはっきりとなつて来る。さらにローマ文明の衰亡をはじめ、中世温暖期や小氷期と文明の興亡については、これまで多くの謎に包まれて来たが、近年の年縞による高精度の気候変動の復元によって、気候変動が民族移動を引き起こし、文明の興亡に深くかかわっていたことがあきらかになりつつある。現代の地球温暖化が人類文明の未来に暗雲をなげかけている時、マヤ文明の崩壊やローマ文明の衰亡、さらにはグリーンランドの開発や魔女裁判が気候変動といかにかかわっていたかは、気候変動の時代を生きなければならぬ若者に警鐘となるであろう。

第六章の講義は「森林環境文明論」である。現在の地球が宇宙という海にポツカリと浮かぶ小さな生命の島であることはだれもが認識できる。イースター島の森を破壊し尽くしたときにモアイの文明が崩壊したように、この地球の森を破壊し尽くしたときの未来に待っているものはイースター島と同じ運命である。本章は熱帯雨林の激しい破壊が進行する時代を生きなければならぬ若者へのメッセージとなるであろう。人類が生き延びるためには島の持続性が探究されなければならない。日本の島国根性のなかにこそ、二一世紀の人類が生き延びる叡智がかくされていることを、イースター島の教訓を反面教師として、我々は学ぶことができるであろう。

第七章の講義は「動物環境文明論」である。その講義の本質は「動物観と文明」ということである。

理科系の学生には少し聞き慣れない言葉を使わなければならないかもしれない。しかし、自然科学も人間が行う学問であるから、最終的には、「あらゆることは人間の心に行き着く」というのが私の考えである。ここでは動物観の変遷をとりあげ心と文明についてお話をしたいと思う。

第八章の最終講義は「環境生命文明論——未来は生命文明の時代」である。二一世紀に地球環境問題にあえぐ人類が、その危機を回避し自然と人間が共存可能な持続型の文明社会を構築するためには、生命に対する考え方を根本的にみなおし、生命文明の時代を構築することが必要であることを述べて講義のまとめにした。

写真家井上隆雄氏とその弟子竹田武史氏には、写真の撮影でたいへんなお世話になった。末筆ながら記して厚くお礼申し上げます。なお撮影者の名前が記されていない写真はすべて私が撮影したものである。

二〇一六年三月二五日

安田喜憲

環境文明論―新たな世界史像―

目次

第一章 環境文明論とは

1 新しい世界史像を求めて 46

(1) 超越的秩序の文明と現世的秩序の文明

龍は超越的秩序のシンボル ヘビは現世的秩序のシンボル 現世的秩序の文明も存在する
超越的秩序の文明のみが文明という考え

46

(2) 文明の不死の思想は砂漠で誕生した

砂漠の民が超越的秩序の考案者 文明の不死の思想

52

(3) 命の連鎖を繋ぐ文明は森で誕生した

現世的秩序の文明は森で誕生した 現世的秩序の文明は命の輝く文明

56

(4) 「力と闘争の文明」が「美と慈悲の文明」を蹂躪した

超越的秩序は大義名分に利用された 生命を輝かせるために現世的秩序を重視

58

(5) 科学者はいったい何をなすべきか

二〇三〇年の危機を目前にしてなすべきことは

二〇年先・五〇年先の予測が重要

62

2 環境文明論は二一世紀の科学

67

(1) 独善的世界史からの脱却

文明は半乾燥地帯でのみ誕生したという欧米人の独善 トインビーと池田大作の対談

文明論の師・伊東俊太郎 日本人の心が見直されなければならない

67

(2) 弱きものの立場に立った科学の実践

歴史は風土と密接にかかわっている 弱いものの立場に立つ

75

3 梅原猛と稲盛和夫

79

(1) 仏教が開く自然と人間の共存の世界

梅原猛と百年後も評価される学問 法華経と地球環境問題

79

(2) 「利他の行」に立脚した新しい文明の未来

稲盛和夫と人類の未来

84

4 環境考古学を提唱する

88

(1) 自然と人間の関係の研究こそ王道

戦後日本の歴史科学の過ち 文明を発展させた要因が文明衰亡の要因

88

(2) 環境考古学の提唱

91

第二章 環境文明論の最新の方法——年縞の発見

1 ゆるぎない年代軸の確立 102

(1) 年縞の発見

アジアで最初に年縞を発見 水月湖の年縞年代が世界の標準時計となる 白黒がセットになった年縞 フィンランドでも見つかった 信頼性の高い年代軸が得られた

102

(2) 渤海滅亡についての定説を覆す

気候変動と歴史を年単位で対応させられる 白頭山と十和田の火山灰

109

(3) 災害史や中国大陸の気候を年単位で復元する

年縞が示す地震・洪水・人為的改変 自然破壊や汚染の歴史を定量的に年単位で復元する
年縞中の寄生虫の卵 昆虫の化石も環境史を復元する有効な指標 中国大陸の気候変動も復元

113

(4) 過去の海面変動の詳細な復元

甘きこ 潟湖の年縞の分析 死海の年縞

116

2 氷の年層からも環境史を年単位で復元

118

(1) グリーンランドや南極の氷床に形成される年層

氷の年層から大気組成の変化を復元する　この二〇年間は大気が異常　水温や気温の変動を復元する　亜間氷期と亜氷期を繰り返した氷河時代　グリーンランドの年層の問題点　二〇〇三年に年層に関する論文が『サイエンス』に載る　サンゴや鍾乳洞による気候変動調査

(2) 気候変動と生態系変動の地域差が解明されはじめた

年層と¹⁴C年代測定値とのズレ　一万五〇〇〇年前の急激な地球温暖化　北半球の気候変動の分析結果　日本はまさきき温暖化の影響を大きく受ける　日本は、ヤンガー・ドリアスの寒冷化の影響は小さい　生態系の変化には地域差がある　IPCCの予測通りなら人類の生き残りは難しい　モンスーンアジアが温暖化の影響を大きく受ける　この分野のノーベル賞はクロフォード賞

3 高精度の環境史復元のために

132

(1) 深海底の堆積物からは高精度の環境史復元は難しい

エミリア二曲線　千年先の未来より二〇年先の未来のために

(2) 二五〇〇年前には、白色系民族が黄河にいた

DNA考古学　DNA分析による民族移動の復元　二五〇〇年前の中国人は白色系民族だった？

(3) 認知科学が解明する環境と人間の関係

自然と人間の関係を確かなレベルで解明する 森の高周波音を人間は全身で聞いていた
環境の人間への影響が実証される日は近い

(4) 近未来の気候変動を予測できる年縞

最重要課題は「生命の連鎖の持続」 一万五〇〇〇年前の気候変動以上の温暖化 人類滅亡
の危機に直面 二〇年先・五〇年先の予測が重要 今、緊急にやるべきこと

第三章 照葉樹林文化論と農耕起源論

1 照葉樹林文化の誕生 148

(1) 百年後にも残る学問への憧憬

京都学派のフィールド科学 カカニの丘での発想 今西錦司先生の生き方

(2) 世界ではじめての「森林環境文明論」

森が文化を創造する 共通の森の生態系に、同質の文化がある ヒマラヤ↓長江流域↓西
日本に広がる照葉樹林文化 理性中心のこれまでの文化論に反撃 現間氷期は照葉樹林の
生育に適していた ホモ・サピエンスの進化と照葉樹林

(3) 現間氷期でのみなぜ文明が誕生したのか？

ホモ・サピエンス誕生の時代は激しい気候変動の時代だった 世界ではじめて明らかにした

間氷期の長さ 後期旧石器革命 人類は激動の晩氷期に農耕革命を成し遂げる 不安定
だった最終（エーミアン）間氷期 なぜ最終氷期の晩氷期でのみ農耕が誕生したのか？

2 稲作農耕の起源地を新たに発見

167

(1) 稲作の起源地は長江中下流域

長江の森に住む短頭の人々が農耕をはじめた 長江中流域の人々が食料危機に直面

(2) 野生イネが栽培イネへと一気に変換

野生イネの生育地が北上した 多年生の野生イネが一年生の栽培イネに変わる 人口圧も
農耕への転換を促した

3 照葉樹林文化の発展段階説

174

(1) 照葉樹林文化のセンターは雲南省か？

照葉樹林文化はヒツジ・ヤギなど乳用家畜を持たない 照葉樹林文化は「森と水と泥の文明」
雲南省稲作起源説の根拠 照葉樹林文化の発展段階説 照葉樹林文化のセンター

(2) 自分の足で確かめた事実が重要

東亜半月弧 稲作の起源地のはずなのに冷涼 雲南省のイネの遺伝的変異は人工的なもの
だった

4 硬葉樹林文化論の展開

185

(1) ヒマラヤの気候変動や環境破壊の歴史を調査

185

海拔三〇〇〇mのララ湖へ 大量のボーリング機器を運ぶために 距離感を錯覚した危険な選択 フィールド科学はいつも危険と背中合わせ ララ湖のボーリング セメカルピフォリアガシとの出会い 西ネパールから地中海へつながるカシ

(2) 硬葉樹林文化の特色

乳利用をする硬葉樹林文化 お餅が大好きな照葉樹林文化 麦作文化は暴力的でカサツ水洗トイレを考えたのは畑作牧畜民 地球の生命を再生させる原点 オリーブは硬葉樹林文化の重要な要素 地中海沿岸では山火事が多発 ヤギ、ヒツジが森を破壊する 硬葉樹林文化は巨大な石の文化

5 麦作農耕の起源

204

(1) ヤンガー・ドリアスという寒の戻り

一万二五〇〇年前のシリア ヤンガー・ドリアスと呼ばれる寒冷期 深層水の循環が停止した 豊かな森が縮小した 大地溝帯の底に降りて野生の麦類と出会った 麦作農耕への第一歩がはじまった

(2) 家畜とセツトになった麦作

畑作牧畜のライフスタイルのはじまり 最古の森林破壊の証拠

6 これで東洋と西洋は対等になった

212

(1) 東亜稲作半月弧と西亜麦作半月弧

212

204

210

196

稲作漁撈民と畑作牧畜民の相違 「東亜稲作半月弧」と「西亜麦作半月弧」

(2) 照葉樹林文化は稲作が軸、硬葉樹林文化は麦作が軸

東西の文明は同じスタートラインに立つ 東西両文明の起源地を特定できた

第四章 稲作漁撈文明論——長江文明の発見

1 人類文明史の一大発見 220

(1) 稲作漁撈民が文明を持っていた

人類史を書き換える発見 「安田、この良さがわからんのか！」 長江文明の発見 畑作

牧畜民の文明とはまったく違う文明の可能性が見えてきた 日本の考古学者からの強い批判

湖南省城頭山遺跡は都市型の遺跡だった コメと魚介類を食べる人々は文明を持っていない

と考えられてきた 六三〇〇年前の円型の城壁 長江流域では六三〇〇年前に気候変動が

あった 鳥取県東郷池の年縞の分析結果とも一致した チベット高原の湖、死海のデータ

とも一致 六三〇〇年前の冷涼期に入ると北緯三五度以南の地では夏雨が減少した 乾燥

化で稲作に関わる都市型集落が誕生した 乾燥化で畑作牧畜型の都市文明も誕生した 魚

を獲り船で移動する漁撈民の役割

(2) 太陽・山・柱・鳥・蛇・玉を崇拜した長江文明

「太陽は鳥によって運ばれている」と考えられていた 巨木の柱は、天地結合のシンボルだった 「北の馬の文化」・「南の牛の文化」 現世的秩序のシンボルとして蛇を崇拝した 蛇は豊饒と再生のシンボル 玉は山のシンボルだった 稲作漁撈民は天地の結合に最大の価値を置いた 森・里・海の命の水の循環系を維持する持続型文明 稲作漁撈民の精緻さ・清潔さの由来

(3) 稲作漁撈型の都市

最古の焼成煉瓦と粉穀（おこなごみ） 大半が粘性あるジャポニカタイプだった 稲作は照葉樹林文化の最終段階ではなかった 首長級の館と神殿 稲作漁撈民は太陽の赤色を重視した 五三〇〇年前の人口は二〇〇〇人くらいで平城京の二倍 メソポタミアの都市遺跡と同じ規模 「中国文明は千年以上も遅れている」と見なされて来たが 日本の歴史学者や考古学者はマルクスの妄想を信奉して来た 中国文明の源流は稲作漁撈の長江文明 畑作牧畜型の社会は奴隷を作る マルクスの発展段階説は稲作漁撈社会には適合しない 畑作牧畜型の都市は環濠はない 稲作漁撈文明では文字より「言霊」を大切にした 文字と金属器は畑作牧畜文明に特有の現象 インカ文明、マヤ文明と照台すれば稲作漁撈社会の文明を理解できる

2 四二〇〇年前の気候変動が世界を変えた

258

(1) 長江文明は、冷涼・乾燥化で衰亡した

フウの木出土の謎 生木と乾燥木との違い 大洪水のために衰亡したとされてきたが 四二〇〇年前は冷涼・乾燥で大洪水は起こりにくかった 同じ気候変動が四二〇〇年前のメ

ソポタミアにもあり、文明が崩壊した。森の崩壊→川の水量減少→大干ばつ→文明崩壊
「文明を発展させる要因は、文明を衰亡させる要因にもなる」 現代文明にも同様の危機 古
代文明は四二〇〇年前に、ほぼ一斉に危機に直面した

(2) 四二〇〇年前の民族大移動

黄河流域の人々が長江流域に侵入した 長江流域の人々は雲貴高原へ逃れ棚田を造成した
海岸にいた人々はイネを持ってポート・ピールになった 滇王国は長江文明の末裔 フ
ウの木に対する強い思い入れ 北からの民族移動の波が、東南アジア、イースター島にまで
到達する

3 クメール文明にみる長江文明の遺産

270

(1) メコン川を下って人々は逃れた

長江流域を追われてメコン川を下ったという仮説 アンコールワット以前のクメール文明の
痕跡があるはず フンスナイ村の髑髏の山 繰り返されて来た盗掘

270

(2) 長江文明とインド文明の影響を受けたクメール文明

276

フンスナイ村はじまって以来のイベント まず地雷の除去 気温四〇℃・冷蔵庫なし 稲
作漁撈の都市なら環濠があるはず 身長一八〇cmの軍人らしき人骨 「え、女性ですか！」
稲作漁撈社会は女性中心 フンスナイ遺跡には地位の高い女性がいた 「アマゾネスの世界
がカンボジアで発見された」とニュースになった 湖南省の土器とまったく同じ土器が出土
した アンコールワットの壁画にも描かれたケンディ 青銅器原料の七割以上が中国南部

264

から来た 北から南への物と人の移動が立証された 滇王国の高度な青銅器文明 滇王国は女王国であった 中国から東南アジアへの民族大移動は水系によった ソンコイ川を下った倭族が日本へ 倭族はブンスナイ遺跡の建国者? 白い漆喰が塗られた巨大マウンドを発見 チャクラをくわえた人骨 聖なる水の思想が存在した 中国と共通する血の儀礼 ミャオ族に残る水牛の生贄は豊穰の血の儀礼の名残 水の祭壇の原型 千年以上続いた水の文明 インド文明の影響 「扶南国」との関連

(3) 抜歯が語る二回の気候冷涼化による民族大移動

千年後に、もう一度気候冷涼化 死海の年縞分析とも一致 日本は縄文時代晩期であった川崎市の堆積物も三五〇〇年前の冷涼化を示す 東アジアで再び畑作牧畜民の侵入 稲作伝播IIポート・ピープル仮説 水田稲作の東南アジアへの伝播 抜歯の人骨は民族の大移動を示す 弥生時代に大陸から渡来 抜歯周辺文明論 縄文人の抜歯、弥生人の抜歯 二回の冷涼期に北西から侵入した畑作牧畜民が現在の漢民族の祖先 朝鮮半島を経由せず直接日本へ移動した人々もいた 文字より「言霊」を重視する文明

4 東アジアの肥沃な大三角形地帯 311

(1) 「東アジアの肥沃な大三角形地帯」の発見

三つの女王国 照葉樹林文化のライフスタイル 「第二次稲作漁撈文明センター」は棚田で特色づけられる B.C.二二〇〇〜B.C.二五〇年は新世界秩序文明誕生の助走期間だった B.C.二五〇年の温暖化の中で繁栄の足がかりをつくる □ーマ、マヤ、漢の繁栄の絶頂期

(2) AD.二四〇年以降の気候悪化のために東西で民族大移動

三つの女王国は衰退 弥生時代から古墳時代への転換 稲作漁撈文明の価値の再発見

稲作漁撈のライフスタイルが世界を変える

第五章 気候環境文明論

1 マヤ文明の興亡と気候変動 330

(1) あまりに似ている長江、マヤ、アンデスの文明

四大文明は乳利用の文明 ヒツジ・ヤギを飼わない環太平洋の文明 ヒツジ・ヤギは生態

系を壊す 乳利用をしないマヤ文明、アンデス文明（インカ文明） 長江文明衰亡の頃、中

南米では文明の第一歩はじまる 太平洋をはさんだ類似の造形感覚 環太平洋の共通した

世界観 聖樹信仰と鳥信仰 亀の支える世界そして緑の木 天地の結合に豊穰を祈った

ピラミッドは山のシンボルだった 環太平洋の緑の玉 死のボールゲーム 王家も関与

したモノヅクリによる王権の権威化 支配者が労働を尊ぶ文明と支配者が労働をしない文明

環太平洋生命文明圏の都市は、生産に関連した祭祀都市 受け継がれた太陽信仰 ピラミッ

ドに厚さ40cmの漆喰 森が消えて水環境が大きく変化 春分の儀礼が復活

(2) 「新世界秩序文明」を提唱する

完璧な水の循環システムとマヤ文明の繁栄 肥料に人糞を利用 アンデス文明（インカ文明）の棚田と長江文明の棚田は同じ 先古典期がマヤ文明の繁栄期だった B.C.二五〇〜A.D.二五〇年のローマ、マヤ、前漢・後漢、弥生 「新世界秩序文明」と「旧世界秩序文明」 マヤ文明の異常に早いメカロポリスの出現 現代は超スレートの都市化の時代

(3) マヤ文明の興亡と森林破壊・気候変動

亜熱帯林に埋もれたティカル このような風土なら文明が繁栄したに違いない 熱帯林の破壊を止められない背景 深い森の中でも文明は発展した 人類も文明も熱帯雨林で誕生した 砂漠の民の世界観が人類を支配した 先古典期の衰亡と古典期への移行 A.D.二四〇年かそれともA.D.二五〇年か 先古典期後期のマヤ文明の衰亡 古典期の繁栄 雨季と乾季が明瞭な亜熱帯の気候 ティカル遺跡の完璧な水資源の高度利用システム 現代の畑作牧畜民の智慧と技術で貯水に失敗 巨大建築物のための森林破壊 限界点で気候変動が襲った マヤ文明はなぜ崩壊したのか 雨季の到来を遅らせた気候変動 年縞の発見が鍵になる 亜熱帯林の回復と後古典期のマヤ文明

(4) マヤ文明が現代人に語りかけるもの

マヤ文明終焉の地 ケツアルの羽の威力は今も生きている 人類の未来への警鐘 「地理上の発見」と名づけた時代は「破壊と殺戮の時代」のはじまりだった

2 ローマ文明衰亡の原因は、気候悪化と森林破壊

389

(1) 森林消失と気候悪化でミノア文明滅ぶ

389

382

359

文明の興亡を気候変動で論じる時代になった 認知までに二〇年を要した気候環境文明論
マグマの活動が人類文明史に与える影響 地殻変動と火山活動の活発な地中海 クレタ島
繁栄の背景には豊富な森林資源 ミノア文明崩壊の原因は、サントリー二島の大噴火ではな
い 森林資源の枯渇がミノア文明崩壊の最大の要因 死海の年縞が示す「サントリー二島
の大噴火による地中海世界の気候変動」 地中海文明の興亡と北緯三五度線 冷涼化時代の
後半には海の民が荒らしまわった 放牧したヒツジ、ヤギが森の再生を不可能にした 冬
雨で表土が流出した

(2) 気候変動・森林破壊と文明の興亡

ローマ海退とポスト・ローマ海進は検討を必要とする ローマ帝国の領土拡大は温暖な気候
の賜物 温暖湿潤期にユダヤ民族が発展 イエス誕生の時代の年縞には塩の結晶があった
イエス誕生の頃の死海は緑豊かであった 気候はAD.一〇〇年頃から不安定化、中国では気候
災害が増、ローマで疫病流行 AD.一八〇年頃の気候変動で中国では黄巾の乱、日本では倭
国大乱 「邪馬台国小温暖期」到来で邪馬台国発展 ローマは繁栄のために森を収奪した
現代文明は地下資源を徹底的に収奪 ローマ人には、生態系を管理する態度もあった

(3) なぜ、ローマ帝国は小さな気候変動で衰亡したのか

コインの銀含有量低下が帝国の衰亡を語る AD.一八〇年前後にローマでペスト流行、東アジ
アは大動乱 AD.二三五〜二八四年のローマ衰亡時代は、気候が冷涼化し農業生産は減少した
冷涼化でゲルマン人がローマ侵入 AD.二四〇年以降中国は三〇〇年にわたる動乱、死海は乾

燥化　小さな気候変動がローマを衰亡させた　地中海地域の森林を破壊し尽くしたために
AD二四〇年にはじまる気候悪化期　一九五〇年代が現代文明の転換点　エネルギーとお金を
投入すれば幸福になれるという神話はウソだった　カラカラ帝の大浴場完成に匹敵する北
京オリンピックと上海万博　二〇三〇年頃に中国衰亡の兆候が明白になる

3 中世温暖期と古代東北の開発

422

(1) 渤海と古典期マヤ文明の崩壊

万葉冷涼期から大仏温暖期へ　温暖化すると風水害や干ばつそして地震が多発する　温暖
化の時代には伝統文化が再評価される　自然との共存を旨とす神仏習合思想の誕生　「大仏
温暖期」にはじまった古代東北の開発　「大仏温暖期」における渤海との交流　突然滅亡し
た渤海国の謎　渤海滅亡の原因は九二〇年頃の冷涼化　十和田カルデラの大噴火で世界的
に冷涼化した

422

(2) 日欧の中世温暖期と古代東北の開発

431

前九年の役と後三年の役は東北大開墾によって引き起こされた　中世温暖期極期への突入が
日本中世社会を成立させた　バイキングがグリーンランドに入植　冷涼化するとモンゴル
など遊牧民が大活躍する

4 ヨーロッパにおける小氷期の気候悪化と魔女裁判

439

(1) 冷涼化とペスト大流行

439

ベスト大流行の背景は氣候の一时的冷涼化　ウィルスと氣候変動の深い関係　森林資源が枯渇する中での小氷期の到来　一七世紀にヨーロッパの森林は破壊され尽くした　こうしてベスト大流行の舞台装置が完成した　ローマ人、イスラム教徒は浴場好きなのにキリスト教徒は入浴に無関心だった　十字軍遠征で中世ヨーロッパにトルコ風呂の知識が伝わった　風呂は危険なもの、避けるべきものになる　王や王妃はめつたに入浴しなかった　森林が消滅し公衆浴場の維持が困難になった　ヨーロッパの森が復活するとともにベストの災禍も終息した　不潔さと環境破壊の密接な関係　シェークスピアの文学は不潔の極致から生まれている　日本の仏教は風呂を奨励した　清潔な宗教と不潔な宗教の相違　ドブネズミがクマネズミを追い出してベスト流行が終わった　ヨーロッパ人はドブネズミに助けられた

(2) なぜ、キリスト教世界は魔女を生んだのか

ブドウの収穫量と氣候変動　小氷期のヨーロッパは危機に直面すると魔女を生み出さざるを得なかった　魔女裁判はアニミズムの神々を抹殺した報い　アニミズムが残る北欧では魔女裁判が少なかった　一六〇〇年代前半の第一小氷期に魔女が爆発的に増えた

(3) 現代社会でも魔女狩りがはじまっている

アメリカとロシアの動向は不気味　魔女裁判の嵐が吹き荒れる日本の大学

(4) 自然資源を搾取し尽くした現代は、わずかな氣候変動で崩壊する

小氷期の影響をめぐる日本とヨーロッパの相違　第二小氷期の時、日本はギリギリまで自然資源を使い尽くしていた　氣候変動の影響は、受け手の社会の在り方と関係する

5 地球温暖化と現代文明の危機

464

(1) 二〇三〇年は干ばつとスピック

カリフォルニアの干ばつは間違いない 日本は豪雨・台風・大災害に見舞われる 黄河・
西アジアの住民は環境難民となる 「水を巡る戦争」の恐れ 漁業資源はあと一〇年で枯渇
ローカルが世界に直結する時代 市場原理では本質的問題は何も解決できない

464

(2) 二一世紀の科学者の使命

現代社会は気候変動に対して脆弱な社会 二〇年後の世界にどう役立つか 人類は寒冷化
を体験している 二一世紀の地球温暖化で人類絶滅の恐れ 科学者に時間の猶予はもうない

469

第六章 森林環境文明論

1 森が失われると文明は崩壊する

482

(1) 畑作牧畜文明の地球支配

古代の神話が現代に語りかける メソポタミアの神話『ギルガメシュ』 『日本書紀』に記
された森の神イタケル フンババは殺されイタケルは勲功の神になった 森林破壊の畑
作牧畜文明が世界を支配した 旧石器時代末期の人々は草原を捨て森に依存するようになっ
た 「悪魔のプログラム」がはじまった 自然征服型文明の誕生 人類最古の物語は森林

482

破壊の物語だった 気候変動期に人格的一神教が生まれた 階級支配の思想は、自然と人間の関係にまで及んだ 一二世紀以降ヨーロッパの森が失われた 森林破壊の文明は世界に拡大した 畑作牧畜文明の地球支配がはじまった スペインは森を破壊し尽くした 二二世紀は第五の砂漠化の時代 水の危機が迫っている

(2) クレタ島は地球の縮図

和辻哲郎と亀井勝一郎のエンタシス 古代地中海文明は森の文明だった

(3) 日本文明は森の文明

森の列島 森の旧石器文化 森の縄文文化 森の農耕文化 日本の農耕は里山に依存

2 地中海文明は森の神々を殺してしまった

503

(1) 地中海は美しい痩せ海

紺碧のエーゲ海とハゲ山 ハゲ山の調査 四〇〇〇年前はマツやナラの深い混合林に覆われていた 南部メソポタミアの深刻な木材不足 エブラ王国を攻略してレバノンスギを手に入れたナラームスイーン王 エジプトもレバノンスギを大量に使っていた 五〇〇〇年前にアスサリエ山の森は消滅した 魚の釣れない地中海 四〇〇〇年前、クレタ島は森に覆われていた 森が消滅しミノア文明が崩壊した ペロポネソス半島の材木に依存したミケーネ文明 ミケーネ文明発展期にはコムギの高い収穫があった 文献史学の成果とも符合した ギリシャの山火事と森林破壊 荒唐景観なのに懂れていたのだ

(2) キリスト教が広まると荒廃景観が出現する

マリアアの被害に悩まされた地中海沿岸　ライオンと蛇を踏みしめて立つキリスト像　キリスト教の支配する時代に無差別の森林伐採がはじまる　マリアア蚊の大発生で西ローマ帝国の都ラベンナは衰亡する　森の神を殺して、森を破壊する自由な心と権利を獲得した　それはゆきすぎた投機の横行と似ていた　地球温暖化で危機に瀕するベネチア　ベネチアはマリアア対策で海上に建設された　地球温暖化による海面上昇でマリアア再来の心配　残された方策とは

3 イースター島文明の崩壊が語るもの

530

(1) イースター島はヤシの巨木の森の島だったのに

木のない草原の島　モアイは陸を向いて立っている　台座の下に村長の遺体を埋葬　モアイを作ったのはポリネシア系の人々　気候変動による民族大移動が、南太平洋の民族の玉突き状態を引き起こす　長耳族が支配者だった　モアイはどこでどのように作られたのか？　モアイはどのようにして運ばれたのか？　モアイの大きさはどれくらい？　モアイ倒し戦争と石組みの家　なぜモアイ倒し戦争が起こったのか？　かつてはヤシの巨木の森があった　イースター島から年縞を発見した　食料危機が起こった　食人も行われた？

(2) 人々は森の消滅の後にやって来る危機を無視した

巨大化するモアイ　文明の暴走が巨大化を生む

4 現代文明は二〇三〇年頃に危機に直面する

553

(1) 宇宙や深海底の研究の前に、身近な自然の研究が必要
文明暴走の恐怖 二〇五〇年に、熱帯雨林はゼロに近づく

(2) 二〇三〇年が、地球の豊かさの限界

555

イースター島の文明崩壊モデル 人口二万人に達した直後に破滅した 現代文明崩壊のモデル
デル 現在の自然破壊のスピードはイースター島の数万倍 熱帯雨林は限りなくゼロになり、食料資源は、四分の一になる

第七章 動物環境文明論

1 メドゥーサの変貌にみる動物観の変遷

564

へビと人間の長いおつきあい 神だったメドゥーサ メドゥーサが化け物になる歴史
恐ろしいメドゥーサ 美しくなったメドゥーサ 迫害されたメドゥーサ 化け物にされたメドゥーサ
メドゥーサの変貌は森の破壊と機を一にしていた

2 日本神話に登場するへビ

576

日本人の動物観のルーツ ヌカピコとヌカピメの伝説 自然への畏敬の念 動物の霊性を守った里山の森

3 森の破壊とへびを崇拝する文明の崩壊 583

へびみこ巫女のお棺

森の歴史研究から

へびを飼う容器

パルテノン神殿の主

日本の

へび信仰

4 目玉もへびと同じだった 590

飛び出した目と大きな耳

命の再生と循環

伏羲ふくぎと女娲じよか

聖なるカラス

5 「森の民の心」の継承 595

人間も森の一部

失われた日本人のアイデンティティー

日本の歴史と伝統文化を子孫に

第八章 環境生命文明論——未来は生命文明の時代

1 生命文明の時代を構築する 600

(1) 広大な宇宙の中で「生命の連鎖」を維持している地球

地球は銀河の片隅にある

物質エネルギー文明は地球のエネルギーを搾取する

「神の存在

を認め難くなりつつある」

「生命の連鎖」に神の手を見る

生命は絶滅を克服した

(2) 二一世紀の科学は「地球生命科学」が主流

近代ヨーロッパの科学は物質エネルギー文明をサポートした

次代の文明を構築するために

生命の連鎖が維持されている不思議な地球　森の命が人間を救う

(3) 森で暮らした縄文時代は生命を大切に育てる心

六〇〇〇年前の縄文の子供の足形　生命を誕生させる女性中心の社会

2 アニミズムの復権 611

(1) 「利他の心」「慈悲の心」を醸成した水利共同体

太陽のリズムは生命のリズムと繋がっている　命の水の循環系を維持しないと成り立たない

稲作漁撈社会　畑作牧畜社会では個人主義が広がる　構造改革が人と人の繋がりを切断し

た　バリ島に学べ

(2) 殺し合いを回避した「利他の心」「慈悲の心」

殺し合いを回避したアニミズム　超越神を崇拜した時、人間は残虐になれる　中国人の怪

訝な表情　漢民族は四〇〇〇年来植林をしたことがない　中国要人の発言に激昂した

「漢民族が通った後には草木一本残らない」　アングロサクソンは三〇〇年で八〇%の森を破

壊した　日本人の責任は重大

3 二〇五〇～二〇七〇年頃に現代文明は崩壊する 622

(1) 中国文明の衰亡は二〇三〇年頃にやって来る?

現代文明の豊かさの限界点は二〇三〇年　メドウス「慈悲の心」・安田「美と慈悲の文明」

「ユニーロがないんだ」と言いつつ　アニミズムと慈悲の心

(2) 人への信頼が日本社会を維持している

天の啓示だったのか 京都駅に財布を忘れる 忘れた財布は届けられていた 良心がある限り大丈夫 「君は良心を語ればいい」 「京セラフィロソフィ」が世界を変える

626

(3) 過去に感謝し未来に責任を負う

個人の欲望を中心にした経済理論 水の危機

632

(4) 農山漁村が未来を生き抜く力を与えてくれる

過去こそ未来への道標 「逆ピジョン」の提案 農山漁村こそが未来を拓く生きる力の源
ローカルな地域資源の利活用 過去こそが未来を生き抜くヒント

635